

文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.94 2022年6月26日発行
川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369
ホームページ：http://www.keihinkyoudougekidan.com/bunkano-nakama/

第8回 川崎郷土・市民劇「お〜い！煙突男よ一天空百三十尺の風」公演 好評のうちに終了しました

京浜協同劇団の和田庸子さんの作、東京芸術座の杉本孝司さん演出による市民劇が、多摩市民館、サンピアンかわさきで5ステージ行われ、2400人を超える方が観劇しました。出演者、観劇者、スタッフの方々に感想をお寄せいただきました。

役を通して見たこと

平井 陽菜

まず、無事に5回公演を終えられたことに安堵しています。今年の1月から4ヶ月も稽古をしていたのに本当にあっという間でした。本番を終えてもちろん達成感はありますが、なぜかまだ通過点でこれからも稽古が続くようにも思ってしまいます。今振り返るとこの作品に向き合っていた時間は幸せでした。

私は小学生の頃からお芝居が好きだったのですが、市民劇には参加したことがありませんでした。去年の9月、オーディションがあることを知り新しい場所に踏み出すことに決めました。少しの緊張感を抱きながら初対面の方々と稽古が始まり、演出の杉本さんのお話に刺激をうける日々でした。共演者の生き生きとした姿に圧倒され、このメンバーでどんな作品が生み出せるのか、心を躍らせていました。

私が演じたすずは芯のある強い女性です。役をいただいた時、最終的には自分の納得できるすずを演じられるようになりたいと思いましたが、彼女の強さをどう表現していいのかわかりませんでした。杉本さんのワークショップに参加して声の出し方から教わり、稽

古ではすずの感情やシーンの状況の道筋を示していただきました。その道筋を徐々に自力でたどれるようになり、納得して演じられる瞬間も増えてきました。しかし本番が1ヶ月後に迫ったころ、通し稽古の動画を見たときに衝撃を受けました。自分が思っていたようにできていないところが多くありました。客観的に見ると表現しているつもりなのに表れていなかったり、自分の仕草が腑に落ちなかったりして想像と違う自分の姿が残念でなりません。それから本番までに変化できたのかは正直わかりませんが、本番ではすべてを相手にゆだねることにしていました。相手の台詞をきいてそれに反応するという一番基礎的なことだけを頭に入れておきました。不思議なくらいリラックスした状態で舞台上に立ち、煙突にのぼった男を見上げるという最後のシーンでは、あの照明の向こうに本当に男が立っているんじゃないかと思うほど情景がありありと見えてきました。

時間をかけて役を作り上げてきましたが、今では単純にすずを尊敬しています。うちに秘めた思いを強く持って、悩みながらも立ち向かっていく姿はとても美しく見えます。自分と似ている部分もありますが違う部分も多くあって、私のあこがれの人になりました。私は今学生なので、これから先自分は何がしたい



写真撮影©小池汪 (以下同)



のか何になるのか考えている真っ最中です。でも簡単に答えが出ることではないし、アイデンティティは確立できません。ただ、煙突男が言った「誇りをもって生きる」という言葉はいつも変わらず心にとどめておきたいです。ずずが生きる糧にしていたように、私もこの言葉を胸に刻んでおこうと思います。

(女工すず 役・出演者)

川崎郷土・市民劇「お〜い！煙突男よ」

公演を終えて、雑感

山田 育代

突如ふってわいたコロナ禍、加えて年々仕事や家族の中での自分の責任が重くなり、演劇を職業としていない私が舞台に携わっていったよいかと常に自問自答を繰り返していた日々「市民劇オーディション一緒に参加しましょ〜♪」という一通のLINEメッセージが届きました。参加申込締め切り当日に届いたメッセージに大きく私の心が揺れ動きます。

2010年「黒と白のピエタ」以降、もう一度庸子さんの作品に触れてみたいと思っていたこと、作品自体を以前映像で拝見したことがあり魅力的だなと思っていたこと、杉本演出であること、おそらく参加されるであろう京浜協同劇団の皆様方と久しぶりに一緒にお芝居がしたいと思ったこと、諸々が私の気持ちを動かし始め、本当に滑り込みで「えいやっ」と応募書類を添付したメールの送信ボタンを押しました。

とはいえ自身や家族を含め、突発的なことが起きて完走できなくなるのでは、と常にびくびくしながらのスタートでしたが、今は色々な方々のお力添えをいただき、無事全日程を駆け抜けることができましたこと、本当に感謝しています。

市民劇参加は2013年の第4回川崎郷土・市民劇「大なる家族」以来でした。実に9年ぶり！

今回私がキャスティングされたのは、デイサービスで働くフィリピン人ヘルパー〈マリー〉役。

物語の本筋にはほぼかわりませんが、家族のため、生活のために故郷を離れて働く姿は、時代や国は違っ



ても女工さんたちとどこか通じるところもあり、物語を重層的にする一役を担ったのかなぁと思っています。

始めの頃の稽古では、台詞をうたって、言葉の意味を考えないで、形容詞をたてて明るいトーンで、いつもと真逆のダメ出しに戸惑いもありましたが、陽気でフレンドリー、ホスピタリティーにあふれバイタリティーがある、そんなマリーの逞しさに引っ張ってもらい、時には背中を押してもらいながら、役と二人三脚しつつ、共鳴しつつ、舞台を作り上げる過程を楽しませていただきました。ラストシーンでは雨の向こうに煙突男の姿とともに、マリーの故郷で待っている家族が見えたようでした。

舞台が終わると、作品や演出が望んでいた役割をちゃんと果たせたのかなぁといつも自問自答しますが、自身の進歩や出来不出来はさておき、今回一の収穫は演出のダメ出しを浴びながらどんどんと周りが変わりだし、作品がうねりだす瞬間を間近に感じられたことでした。

本当に稽古中に何度感動したことか！



リハビリと思っていたのに週3〜4日の稽古場通いはなかなかハードでしたが、たくさんのエネルギーや感動を年齢も経験値も様々な共演者のみんなから受けた日々は、懐かしい方々との再会や新しい方々との出会いも相まって本当に素敵な大切な時間になったなぁと改めて思います。

そして何より会場のお客様が本当に暖かかったこと、本番に至るまで全身全霊をかけてありとあらゆるサポートをしてくださった演出・制作・実行委員の皆様・作曲・振付をはじめ舞台監督や照明・音響・表方などスタッフの皆様方が支えてくださったことに感謝です。

今回参加させていただけたことに改めて深く感謝申し上げます。

最後になりますが、作者和田庸子さんに最大限の賛辞と感謝を捧げたいと思います。

本当に本当にありがとうございました!!!

(マリー 役・出演者)

少しずつ周囲の方々に恩返しを

村上 浩史

この度は市民劇へ参加させていただき、ありがとうございました。

今回の芝居への参加は、私個人にとって救いの一つでありました。(大袈裟ではありますが)仕事の多忙や私生活の空虚さを感じていたところに、ちょうど募集要項が目に入りました。何をやるのかも理解しない、自分の目的もはっきりしないまま応募したことを、思い返すと気恥ずかしく感じます。

ただ、単純に自分の中の全てが解決したわけではありませんでした。現実、私は働きながら練習に参加する必要があります、初対面の方々とやり取りをして一つのステージを作り上げる。それがどれだけの過程のもとに成り立つのか、それを成し遂げるために全ての方が



どれだけのエネルギーを費やしているか、私の想像が追いつかないほどの時間と労力がかけられていたと思います。それを垣間見るたびに心が引き締められました。自分のことで精一杯だった稽古も、仕事も、私生活でも、さまざまな方々と関わっていることを思い出す契機となりました。

それだけ自分に余裕がなかったのだと思います。これからの自分には好きに生きるよう命じておきます。やっと自分のことが考えられるようになってきたところです。我慢していた分を解放してやらないとまたどん底の気分になりそうで怖いのかもしれません。そうなると、ずーっとその解放に付き合っただけでやらないといけないのかもしれません。でもそれが自分自身の扱い方なのだと思うと、やれやれと付き合っただけでやりたくなくなります。

ひとまず自分のことをケアしてやりながら、少しずつ周囲の方々に恩返しをしていきたいと考えています。…単に皆さんに会いたいただけかもしれません。



日々の面白いことや、ちょっとした空想に耽られる時間がとても久しぶりに感じます。いつまでこんな解放的でいられるのかわかりません。しかし、元気は失ってもまた取り戻せることが今回の市民劇を通して実感できました。きっとこれからも面白いことに出会えていけそうです。(田辺潔 役・出演者)

「黙っていちゃダメだ」と今も呼びかけてる!

吉田 美佐子

「お〜い! 煙突男よ」満席の大盛況の中で幕が開きました!

老後の介護問題のデイサービス送迎シーンから、明るく軽快に始まり。その中に当時、沖縄からの女工・宮野すずの体験話で昭和5年の「煙突男」が蘇る。

男(田辺潔)は、煙突に登り訴える前にちゃんと当事者の女工すずさん達に、沖縄や韓国の人間としての扱いされない劣悪な労働や生活状況の裏付けを取り、確信してからの訴えだった。「主義 主張の闘争」よりも、女工の細かい労働状況に臨場感があり、市民も「うん、うん、そうだよな。煙突男 頑張れ!」や、女工たちの訴えの歌声も、♪煙突男の云う通り 希望がなければ生きられない!♪ と、好感度ある青年像。

その男(潔)の母が、息子との別れの言葉にも。「潔





がさかっているものはもっと大きなもの。世の中が、しかたない。どうしようもないとあきらめているものだよ。」と。子を思いながらも背中を押す母の視差の奥深い言葉に。この親にしてこの子ありと思わせるシーンでした。

“歴史は当事者が語る”戦争体験の軍人も原爆被爆者も大空襲の孤児はもちろんのこと。大震災や労働者の市民の生活も、当事者だからこそ現状を伝えられること。作家の小説、評論家や教科書の文字だけではなく、口伝えを決して失わないようにと体験談の大切さ。すずさんの証言を通して「その感覚がとても大切なんだよ」と言われてるようで、改めて再認識いたしました。

総勢40名の出演者は、ボリューム満点。力強く訴えたいことはミュージカル風の歌や動き！その効果で、声は響きわたり会場を共鳴で包み大劇場での市民劇感がありました。

また、舞台では、さりげないシーンでも、それぞれの役で個性が表現され、活かされ。役者さんのそれぞれの味がありました。

コロナ禍での稽古では、いろんな苦労を察すると、多くの皆さんの頑張り千秋楽まで無事終えられ、有難い喜びですね。

15年目に再演として、今回の市民劇に選ばれた作者の思い、今も現実の紛争や日本の弱者、貧困の危険感の中でも、希望に変えて伝えたいメッセージが、たくさん散りばめてあるようでした。

そう、「黙っていちゃダメだ。力を合わせて生きて



いこうよ」このメッセージなども、私なりに、幾つも受け取りながら、足取りも軽快な帰り道でした！

(横浜市戸塚区在住)

「お〜い！煙突男よ、天空百三十尺の風」に出演して より良い公正な世の中の実現に

番藤 松五郎

舞台であれ映像であれ人の心をうつ優れた作品に出演できれば、たとえどんな役であったとしても、もうそれで死んでもいい。私は常々そう思っております。

川崎市民劇「お〜い！煙突男よ」の台本を受け取った時、やっとその時が来たと胸が熱くなりました。

この作品の主演は表面上は煙突に登った一青年ではありますが、実はその時代の民衆です。資本主義が必然的にもたらす格差社会で労働を搾取され権力によつ



て虐げられた当時の社会の圧倒的多数の民衆です。私たちの父母もしくは祖父母の同時代の人々です。

私が通っていた小学校の隣には高い煉瓦塀に囲まれた何棟もの二階建ての木造建築の連なりがありました。それは空襲を免れた戦前の紡績工場の女子寮で、塀の上にはガラス片が埋め込まれ鉄条網が張り巡らされておりました。まるで監獄、いや強制収容所です。当時の人々が如何に貧しい生活に喘ぎ^{いか} 強政に沈黙を強いら^{あえ}れ、戦争に駆り出され空襲に焼かれて死んでいったことでしょう。この多くの本当に夥しい人々は私たちと決して無縁ではありません。そして私たちはその犠牲の上に生きているのです。

演劇は確かに娯楽の一つではありますが、心をうつ優れた劇には現代を生きる人々の共感を呼ぶ何らかのメッセージが込められています。あるいは人の世の真実への目覚めをうながし、精神の高揚をもたらすものが含まれています。そうした優れた劇の創造に役者として加わられた時、私は観客の皆様とともに一種のカタルシスを味わうことができるのです。

かつて人類は単一の人種、民族で同じ言葉を話し争うこともなく一つの大陸に平和に暮らしていた。それが天変地異により陸地が分断され、人種が生じ言葉が通じなくなり相争うようになった。こんな伝説があります。

いつか、いつの日か、砕け散った願いが
いつか、いつの日か、一つになる日を
信じて私たちは、今日を生きる

終幕のこの劇中歌を私は涙せずに口ずさむことができます。私たちが営んでいるささやかながら掛け替えない生活の幸せは愚かな核戦争によって跡形もなく一瞬のうちに消し去られるかもしれない危機に直面しています。

この「煙突男」の劇がより良い公正な世の中の実現に少しでも役立つことを願ってやみません。煙突男もまたあの世の天空からそれを願っていることでしょう。
(令和4年5月20日) (町内会長 役・出演者)



煙突男の勇氣ある行動はすごい！

久手堅 鮎子

50年前の5月15日は沖縄が日本に祖国復帰した日です。

その記念すべき日に「おーい！煙突男よ」の市民劇を見ることができ、感激しました。

この会場の皆様が、ご一緒に沖縄を感じながら、時代を感じながら、涙あり笑いありと楽しんだと思います。

昔は貧しさゆえに、親のため、家のために女工さんや集団就職で親元を離れて働きに行きました。物語のすずさんたちの苦労や悲しみあったからこそ、今の沖縄の土台があると思います。

私事で申し訳ないですが、私は昭和53年に沖縄から3人の子どもたちとともに川崎市幸区に移り住み、もう古里の沖縄より川崎のほうが長くなりました。



今では5人の孫と2人のひ孫がいるれっきとしたおばあーです。70代になったおばあーでも、沖縄にいた若い頃は復帰運動もよくしました。「沖縄を返せ」の歌は今でもよく覚えています。

あの煙突男の勇氣ある行動はすごい！ はたして今の時代にできる人がいるだろうか！

劇団の皆さんの迫力も会場いっぱいに伝わり、感激しました。

沖縄のアンマーが娘のすず^{ぬち たから}に、命ど宝どう！ と命の大事さを伝えていきます。

本当に、毎日ウクライナの目もおおいたくなるような悲しいニュースが流れています。

私たちが1人ひとりが戦争反対を声を大にして訴えたいものです。

最後に、作者の和田さん、ありがとうございました。これだけ大きな舞台を……たいへんなご苦労があったと思います。お疲れさまでした。

(公演協力者、幸区で沖縄料理店経営)

楽しい時間だったなあ

栗木 健

川崎郷土・市民劇「おーい！煙突男よ」の音楽を作らせて頂いた栗木健と申します。

<http://kurikiken.com>

ここに書かせていただくのは確か二度目、拙い文章





ですがよろしくお願ひします。

改めて、「おーい！煙突男よ」の関係者の皆さん、お疲れ様でした。

去年の秋に演出の杉本孝司さんから電話でお話をいただき、とても嬉しかったのを思い出します。

それから打ち合わせがあったり相談しながら、じっくりと音楽を形にして行きました。

音楽の作り方は全く自由に作らせていただく場合と、色々方向性や意味合いなどヒントをいただいて作る場合があり、今回はどちらかというと後者の方でした。

ボクは制限がなくゼロから作るより、ある程度枠がある中であの手この手と考えるほうが好きなので、逆にのびのびと作らせていただきました。

楽しい時間だったなあ (^_^)

ちなみに元々打楽器奏者のボクはパソコンで音楽を作る事が多いです。

楽器倉庫兼仕事部屋は季節柄寒くて長時間居られなく、遊び盛りの子どももいるので、集中して作るのは早朝か子どもが寝静まった後に居間のテーブルの上。

そういえばボクの父も、脚本などを書くのは書斎ではなく居間のテーブルの上だった事を思い出します。

…DNAに刷り込まれてるんですかねえ。笑

と、ここまで書いたあと、突然の悲しい知らせが来ました。

和田庸子さんには、いつも色々と気にかけていただ



いてました。

「煙突男」での濃い時間もわすれられません。

おーい庸子さん、寂しいよ。ありがとうございました！
(音楽担当)

市民劇「おーい！煙突男よ一天空百三十尺の風一」を終えて
多くの観客の方々の共感と称賛の中で逝ったのなら

杉本 孝司

“文化の仲間”掲載の原稿のご依頼を受け、間もなく書き上がるという時に、作者一和田庸子さんの突然の訃報を受け取った。余りにも急な知らせに、受け止めることもできないまま、原稿の書き直しをしている。上演報告には相応しくない内容になるかもしれないが、お許しください。

思えば、2005年だったかに、私の所属する東京芸



術座に来訪を受けたのが、京浜協同劇団との、また和田さんとの、そして「煙突男」との出会いと記憶している。近所の喫茶店で御用の趣を伺うと「新人脚本家の和田庸子さんのお書きになった“ミスター・チムニー！天空百三十尺の男”の脚本が上演可能だろうか？」というお話だった。その場で「全体の構成に少し手を加え、一部書き直せば十分可能だと思います」とお答えしたように思う。振り返ってみると、キャスティング同様“評価と判断は最初の感覚が最も正しい”という強引な信条は、短所なのか長所なのか、今も昔も変わらぬ私の行動パターンのようなのだ。

その後、縁があって同じく和田さんの書いた「白と黒のピエタ」というドイツの彫刻家ケーテ・コルヴィッツの生涯を描いた作品の演出もさせて頂いた。ケーテ・コルヴィッツは絵画を学んでいた娘の大学院の先生が研究者だったので、芸術関係の本を娘と共有する私にもなじみ深い人物だった。「煙突男」と「ケーテ・コ

ルヴィッツ」いずれも、私の演劇人生の中でも忘れがたい体験だった。

そして、今回の川崎市民劇としてリメイク版煙突男「お〜い！煙突男よ一天空百三十尺の風一」の上演の演出をさせて頂き、和田さんと三度目のタッグを組むこととなった。

常々「演劇の素晴らしさを、限られた演劇ファンだけでなく、しかも迎合することなく、広く人々の心に届けたい」と願い、ある種の“演劇村”の閉鎖性に違和感を持つ私にとって、「市民劇」は自分の演劇の原点を見つめ直す絶好の機会だった。そして16年ぶりに「煙突男」をリメイクすることは、和田さんと私がこの16年間を演劇人として、人として、どう過ごして来たのか？ 自分は自分たちが望んだ到達点のどこら辺にいるのか？ 成長したのか？ 後退したのか？を知る上でも刺激的な試みだった。分かり易く・楽しい、しかし、芝居の芯は^ま枉げず深い感動を感じられる



芝居を！ 評価はご覧になったお客様にお任せするとして、カーテンコールのあの共感の拍手は、今も私の耳に鮮やかに残っている。

少し落ち着いたら（公演終了後早々に、延ばし延ばしになっていたポリープ切除をしたもので…）ビールでも飲みながら、今度の芝居を振り返り、次の目標などについて話し合おうとした矢先の訃報だった。



和田さん！

あわてんぼうにも程があるよ！ 本格的に脚本家のスタートラインに立ったところじゃないか！ これから、もっと楽しくて、もっと苦しい脚本家人生が待ってたんじゃないか！ 護柔さんや、あなたの子どもたちや、それから、多くの仲間や俺たちを置き去りにして、バイバイはないだろう！ ……悔しかった。

だが、同時に公演が終わって10日間、あなたが呼んだ多くの観客の方々の共感と称賛の中で逝ったのなら、それはそれで幸せだったのだろうと思う。

人は誰もが、必ず死ぬのだけどいつ死ぬのかは分からないという不条理の中で生きている。また、私は一応唯物論者なので死後は無だと思っている。

だが、もしも私の死後の世界への評価と判断が間違っていたなら、また会いましょう！ そして、その時にあなたが逝って、砕け散った願いを胸に、みんながどんな風に日々を生きたか話してあげよう。そして、その時「お〜い！煙突男よ」お疲れ様と云いながらビールを飲もう！

和田さん！

僕は今ほど、自分の判断が間違っていることを願ったことはなかったよ。 (演出、東京芸術座)

第11回 かわさき演劇講座

日程と会場 7月22日(金)夜6時～9時 かわさきゆめホール
23日(土)夜6時～9時 かわさきゆめホール
24日(日)午前10時～午後5時 スペース京浜

講師 大西弘記(演出家/TOKYOハンバーグ主宰)

対象 小学5年生以上～大人。40名(先着順)

参加費 一般1,000円 高校生以下500円

申込方法 ①お名前(ふりがな) ②年齢 ③住所 ④電話 ⑤メールアドレス を書いてお送りください。

申込先 かわさき演劇まつり実行委員会

FAX 44-533-6694 メール: matsuri_engeki@yahoo.co.jp

演劇の基礎を勉強します。初めての方も歓迎です。2023年7月の「かわさき演劇まつり」で、ミヒヤエル・エンデ原作の「モモ」を上演予定です。その演出の大西さんによるワークショップです。

問合せ 川崎市文化財団 TEL 044-272-7366 (平日9時～17時)

川崎演劇協会 TEL 044-511-4951

京浜協同劇団和田庸子さん急逝

京浜協同劇団の和田庸子さんが、5月26日、大動脈解離で急逝されました。和田さん作の市民劇「お〜い！煙突男よ」が好評のうちに終えたばかりで、皆さんに衝撃をもって伝えられました。「お別れの会」は別記の予定で行われますが、関係の深かった方に追悼文をお寄せいただきました。

何故、俺より先に……

藤井 康雄

「もしもし、落ち着いて聞いて欲しい。夕べ和田さんが電話中に突然倒れ病院に緊急搬送されたんだが亡くなった。死因は大動脈解離」5月27日の朝、城谷さんからである。「……」絶句した。

つい10日前に市民劇「お〜い！煙突男よ」を終えたばかりである。15年程前に京浜で上演された彼女の手によるこの作品、市民劇に相応しいものへと改稿作業を続け、稽古場ではコロナ感染者も出るなど困難な状況下で演出助手として大奮闘、制作面でもあらゆる手立てを探りながら二百数十枚を普及するなど超人的な活動を展開していたのに、何故……。

この突然死をそれなりに受け入れるには相当の時間を必要とした。

振り返ってみると彼女の入団は1976年創立から16年目、第二の高揚期を迎えた頃であった。創作劇を生み出すことがなかなかできず「名作路線でいいのか！」という混迷の時期を、然らばと集団で創作劇に挑戦し「九〇二番船、進水！」を成功裡に上演し、次なる飛躍を目指して初めて外部の演出、小田健也氏を迎え「コーカサスの白墨の輪」を上演した次の年に当たる。

その当時私は初めて新人教育の担当に指名され、24期生として入団してきた彼女と出会う事になる。「煙突のあるオアシス」や「例外と原則」の公演実習に取り組んだが、そこでの彼女は常にリーダー的役割を果たしてくれた。聞けば演劇専門学校を卒業しており「何故京浜に？」と思ったが実は彼女の父親は劇団創立期の前後、劇団とのかかわりがあったのだという。そういえば館林公演を企画してくれ事前オルグで現地を訪問した折に和田家にお世話になったが、その時彼女とは会っていないが中学生頃だったのだろうか。

やがて結婚し出産、しばらく休団することとなったが復帰してからの活躍には目覚ましいものがあった。書き手としての自分の生き方を意識しながら「お〜い！煙突男よ」を始めとしてドイツの芸術家ケーテ・コルヴィッツの生涯を作品化した「黒と白のピエタ」、

戦争の悲惨さを元憲兵の証言を元にして書いた「人のあかし」、楢山節考から材を得た「おりん」などの執筆を重ねてきた。まだ66歳、まさにこれからという時期の突然の死である。

彼女の作品は過酷な歴史の犠牲となった弱者や虐げられている人たちに寄り添い果敢に現状変革を目指す京浜にはなくてはならない存在だったのである。

残念としか言いようがないが、これも宿命なのだろうか。

安らかにお眠り下さい。そして私たちを見守っててください。合掌。
(京浜協同劇団代表)

劇団とともに日々歩み続け

二村 終子

京浜協同劇団で和田庸子さんという人に初めて会ったのはいつだったのか、記憶にありません。でも、「あ！桐朋の演劇科を出たんだ——」ちょっと学生っぽい雰囲気もあったような気がします。そして、劇団活動に励む中、和田さんは、妻となり母となり、おばあ様にもなりました。

「文化の仲間」に名だけ連ねていた私が、少しずつこの集団を気にかけて始めた頃、「平和をおもう朗読の会2003」(8月30日)“もし、アンネ・フランクが生きていたら、58年後のこの世界の現実をどう見たでしょうか”という仮説を軸に30分の構成を創った和田さんに、この人って、物書きになる素質があるんじゃないかしらと思ひ、話したところ「今ね、修業中なんです。毎週一本書いていかなくちゃいけないの。たいへんなんです！」と。

「文化の仲間」に名だけ連ねていた私が、少しずつこの集団を気にかけて始めた頃、「平和をおもう朗読の会2003」(8月30日)“もし、アンネ・フランクが生きていたら、58年後のこの世界の現実をどう見たでしょうか”という仮説を軸に30分の構成を創った和田さんに、この人って、物書きになる素質があるんじゃないかしらと思ひ、話したところ「今ね、修業中なんです。毎週一本書いていかなくちゃいけないの。たいへんなんです！」と。

あの日から20年近い年月、2022年、川崎市民劇「お〜い！煙突男よ」が幕を下ろすまで、充実した日々を重ねてきたのだと思います。そして、その創造活動は、この地で、この人々の中で育まれてきたのだと確信しています。

また、和田さんという人は、編集者としての才能も持ち合わせていたようです。なかでも2018年秋に刊行された『安達元彦—音楽の「根」を掘る』は、600ページに及ぶたいへん読みごたえのある本です。よくぞこ

これまで集めたものだと感心しましたが、和田さんの音楽・芸術（人生）への熱き思いが伝わってきました。

「文化の仲間」では、何かあるごとに、和田さんに相談し、様々な助言をいただきました。稽古場の階上に居を構え、劇団とともに日々歩み続けていました。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

急逝の報に今は、ただ——ご冥福をお祈りいたします——と。
（文化の仲間・代表世話人）

早すぎる旅立ち

風のように去って行った

橋本 むらを

5月26日夕方、友人から和田さんが亡くなったと、連絡がありました。信じられず、劇団の和田さんの家に行きましたが、誰もいず確認できませんでした。その後、間もなく事実だと分かったのですが、今でも信じられません。

亡くなる2日前、元気で自転車に乗った和田さんとすれ違い、「煙突男お疲れ様」と、「ありがとう」と声を掛け合ったばかりでした。

新婦人で一緒に活動する中で、学校訪問では校長先生と面談し、学校で困っていることを話し合い、市に交渉したり、暮らしやすい町にするため、地域を一緒に歩き、ここが危ないから直してもらおうとか、上平間バス車庫の早朝のエンジン音がうるさく、近隣の人たちは眠れない、どうにかしてほしいとのことで、営業所に交渉に行ったりしましたね。いつも明るく、次々とアイデアを出し、行動力のある和田さんでした。

新婦人が地域に根を張って、楽しいこといっぱいやろうと話していた矢先のことでした。これからの活躍を誰もが信じ期待していたのに、このようなことになり、言葉になりません。

風のように去って行った和田庸子さん、心からご冥福をお祈りいたします。
（幸区古市場在住）

いちいち驚かされっぱなしだった

安達 元彦

ある日突然の勃発。対応する暇もなく「ちょっと待つ」と思った時はすでに始動している。でもおっちょこちょいの早とちりではありません。なにごと10～20年かけた醗酵で熟した思考の厚み重み深み。

CDプロデュース『この日この地でこの人々とうた・唄・雑唱・劇中歌 1959～2009年京浜協同劇団創立50周年記念』（2009年8月 京浜協同劇団）

劇団とつきあいが長かった関係で私の作曲が多くを占める編集になっており「まるで〈安達元彦劇音楽

アンソロジー〉ですネ」とからかわれています。

出版『安達元彦』書名なんです。「ギョッ!!」でしょ。サブタイトル〈音楽の「根」を掘る〉著者名が「刊行する会・編著」（2018年11月 高文研）



演劇 後半生は劇団座付き作家として精力を注ぎこむ日々でした。

オリジナル脚本としては『白と黒のピエタ 種子(たね)を粉にひいてはならない』（2010年12月 杉本孝司演出）を処女作としていいのではないかと思う。ケーテ・コルヴィッツというドイツの画家彫刻家に傾倒し続けて20数年、その生涯への考察として執筆。

最後の書き下ろし『おりん 姥捨て異聞』（2018年11月 創立60周年記念）原作：深沢七郎「楢山節考」とあるけど、それは額縁で絵の中身は和田庸子のオリジナルだと思っている。

ふりかえてみると、個別の企画だけではなく芝居でも和田庸子からはいちいち驚かされっぱなしだったナとあらためて感じている。

最後の勃発？ 機嫌よく電話の途中で突然倒れたとGoju（佐藤幸一）より知らせ。疲労の蓄積が忍耐の限界を超えていたことに自覚できなかったのか？

（2022.06.07. ADACHI, Motohiko）

（作曲家、文化の仲間会員）

和田庸子さんお別れの会

日時：2022年7月31日(日) 午前11時00分～12時00分
午後13時30分～14時30分

- ・同じ進行内容で午前と午後、2回開催します
- ・参加人数は、午前・午後とも100名規模を予定

会場：スペース京浜（京浜協同劇団稽古場）

会費：1人2,000円

- 内容：・音楽演奏（ヴァイオリン／ピアノ）・参加者献花
- ・和田庸子さんが活動していた各組織と個人からの弔辞（5団体と杉本さん、安達さん）
 - ・遺族挨拶

○会場の人数が限られるため、原則として各団体で午前の部、午後の部それぞれ参加予定人数をまとめていただきます

◎文化の仲間通信◎

◆復帰 50 年記念 沖縄の美

日程 6月23日(木)～8月21日(日)
10:00～17:00(入館は16:30まで)月曜日休館
会場 日本民芸館 井の頭線「駒場東大前」徒歩7分
料金 一般1,200円 大高生700円 中小生200円
日本本土や中国、朝鮮、東南アジアの国々の影響を受けながら琉球王国として独自の文化を形成してきた沖縄。改めて沖縄が「美の宝庫」であることを紹介します。

問合せ 日本民芸館 TEL 03-3467-4527
HP: https://www.mingeikan.or.jp/

◆人形劇団プーク 夏の公演

エルマーの冒険(ファイナル公演)
日程 7月28日(木)～31日(日)
各10:30～/14:00～
会場 紀伊國屋ホール(新宿東口紀伊國屋書店4階)
原作 R.S.ガネット/翻訳 渡辺茂男/脚色 川尻泰司/演出 柴崎喜彦
料金 全席指定3190円(3歳以上均一)
エルマー少年は、仲良しの猫のミミから、動物島にとらわれているかわいそうな子どものリュウの話を知りました。……

問合せ・申込み 人形劇団プーク
TEL 03-3370-3371 HP: https://www.puk.jp

◆劇団民藝公演 破戒

日程 7月30日(土)～8月9日(火)(詳細問合せ)
会場 劇団民藝稽古場(川崎市麻生区黒川)
原作 島崎藤村/脚色 村山知義/演出 岡本健一/
出演 千葉茂則・境賢一・中地美佐子・小嶋佳代子
ほか

料金 一般5,500円(川崎市在住割引5,000円)
U30割引3,300円
劇団が東京青山から川崎市麻生区へ拠点移転をして40周年を迎えます。この節目の年にこれまでの稽古場公演を発展させ、新たな創造と出会いの場としてスタートさせます。
問合せ・申込み 劇団民藝 TEL 044-987-7711
(月～土10時～18時)

◆日本フィル 第48回夏休みコンサート

日程 7月30日(土)14:00開演
会場 カルッツ川崎
演目 第1部 ベートーベン交響曲第5番第1楽章



絵手紙 竹間テル子

／G線上のアリア／ウィリアムテル序曲よりスイス軍の行進 第2部 白鳥の湖 第3部『鬼滅の刃』より《紅蓮華》／たなばたさま／勇気100%
料金 S席: 子供3,200円 大人5,200円／A席: 子供2,500円 大人4,200円／B席: 子供1,500円 大人3,200円

問合せ・申込み 日本フィル・サービスセンター
TEL 03-5378-5911 (平日11時～17時)

◆劇団銅鑼創立50周年記念公演

ふしぎな木の実の料理法～こそあどの森の物語
日程 8月26日(金)～9月2日(金)(詳細問合せ)
会場 シアターグリーンBIG TREE(JR「池袋駅」南改札より地下通路39番出口徒歩2分)
原作 岡田淳/脚本 斎藤栄作/演出 大澤遊/出演 齊藤千裕・深水裕子・佐藤響子・亀岡幸大 ほか
料金 一般5,500円 30歳以下3,500円
こそあどの森で暮らすスキッパーは、郵便配達員のドーモから小包を受け取ります。中には見たことのない木の実が20コほど入っています。
問合せ・申込み 劇団銅鑼 TEL 03-3937-1101
HP: www.gekidandora.com

◆東京芸術座 アトリエ公演 No.44 飛べないくまんばち

日程 8月27日(土)～9月4日(日)(詳細問合せ)
会場 東京芸術座アトリエ
西武新宿線「上井草駅」徒歩7分
作 広島友好/演出 北原章彦
料金 一般4,000円 U30 3,000円 ほか
問合せ・申込み 東京芸術座 TEL 03-3997-4341
HP: www.tokyogeijutsuza.co.jp

◆『小説 岩波書店取材日記』特別販売

昨年の総会で講演をしていただいた作家の中野慶(本名・大塚茂樹)さんのご厚意で、本書購入希望の方に定価2,200円のところ2割引き+送料=1,940円で販売いたします。ご希望の方は、下記電話番号にお申し込みください。お支払方法などご説明いたします。
申込み TEL 080-1161-5101 (大塚)

■文化の仲間ギャラリー■

大谷 敏行①

「厳選」大谷敏行の川柳塾

「自衛」という 言辞で始まる戦争よ
二〇二三年三月二十七日『しんぶん赤旗日曜版』掲載

「モスクワ」が 国の未来を暗示する
二〇二三年五月十五日『しんぶん赤旗日曜版』掲載

八十路 ものともせず太平洋
島嶼詣で 八紘一宇の中国版

参院選 言を左右し逃げを打つ

「盾と矛」矛から盾が欲しくなり
言い換えた「反撃能力」のきな臭さ
侵攻が「拳国一致」を招き寄せ